

- 1 派遣期日 令和4年12月11日(日)
- 2 派遣先 会場名 静岡県三島市民文化会館  
(現地とZOOMでのオンラインによるハイブリッド開催)
- 3 研修内容
  - (1) 主催 日本教育技術学会  
(所在地 〒142-0064 東京都品川区旗の台2-4-12)
  - (2) 研修テーマ 「これまでの実践」×「ICT」で教育の質は向上したか
  - (3) 日程
    - 13:30～13:40 全体会
      - ・ベーシックスキル測定に関する研究発表と討論
    - 13:50～14:25 分科会 (A 小学校教科指導に参加)
    - 14:35～16:10 全体会
      - ①パネルディスカッション  
「次期学習指導要領を見据えて『令和の日本型学校教育』で実現すべきこと」 登壇者：合田哲雄、堀田龍也、向山行雄、谷和樹
      - ②大会記念講演 文化庁 次長 合田哲雄
      - ③総括講演 日本教育技術学会会長 谷和樹
  - (4) 内容
    - ①「ベーシックスキル測定に関する研究発表と討論」 発表者：小嶋悠紀(長野県)
      - 「きりぎりすの山登り」谷和樹氏の音読と初任者の音読を通して「授業のリズムテンポ」を測定する。
        - ・授業にはリズムとテンポが必要であり、測定表による客観的な評価を行い、授業改善を図った。
        - ・授業の流れを止めずに授業のテンポアップダウンをコントロールすること、また、子供とのやりとりの中でリズムを作ることが大切である。
        - ・授業で使う言葉は短く、リズム良く、空白の間がないように意識する。
    - ②「小学校算数科における練習問題自由進度学習による効果に対する一考察」  
発表者：千葉県船橋市立中野木小学校 平山靖
      - 概要
        - ・小学校4年生の算数科で、教科書、eライブラリアドバンスを用いた練習問題の自由進度学習を行い、その効果を検証した。
      - 効果と課題
        - ・ワークテストの思考面は向上が見られた。
        - ・問題を解く量が増えた。
        - ・下位児童への個別支援の時間の確保ができた。
        - ・主体的に問題を選ぶことで、授業の集中度が高まった。
        - ・授業や問題への取り組みに対する意欲が下がる児童がいた。児童へのインタビューを通して分析し、考察の必要がある。
    - ③「Googleドキュメントで卒業論文を書かせる」 発表者：林健広(山口県)
      - 初挑戦でも成功する13のポイント

- 1 なぜ、Google ドキュメントで書くのか、趣旨説明をする。
- 2 まずは、Google ドキュメントで遊ばせる。
- 3 Google クラスルームで、Google ドキュメントの論文雛形を送る。
- 4 机の上に置く物を指示する。
- 5 電子黒板に、子供の文を掲示する。
- 6 日頃の授業で、ノートにたくさん意見を書かせておく。
- 7 今までの板書を Google クラスルームに送り、参考にさせる。
- 8 字数で評定する。
- 9 ICT 端末のトラブルはなるべく速く、一緒に解決する。
- 10 授業の終わりには、Google クラスルームで課題を提出させる。
- 11 家でも課題に取り組ませる。
- 12 評定とコメントを Google クラスルームで送る。
- 13 論文は印刷し、卒業式の日に渡す。

④ 記念講演「次期学習指導要領を見据えて学校教育が実現すべきこと」

～教育 DX と学校の存在意義～ 文化庁次長 合田哲雄

- 今、Society5.0 やデジタル化を背景にした社会の構造的な変化は、「みんなと同じことが大事」から「他者との差異や違いに意味や価値がある」へという大きな変革をもたらしていて、日本社会事態が岐路に立っている。
- 学習指導要領 2017 年改訂、GIGA スクール構想（2019 年～）、中教審令和の学校教育答申（2020 年）、デジタル庁設置（2021 年）、CSTI 政策パッケージ（2022 年）、こども家庭庁設置（2023 年）という矢継ぎ早な動きは「一人ひとりの子どもたちの特性や関心に応じた教育を通じて子どもたちの力を引き出したい」という教育界が求めてきたことの実現を志向している。
- 子供の特性を重視した学びの「時間」と「空間」の多様化
  - ・すべての子供たちの可能性を最大限引き出すことを目指し、子供の認知の特性を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「そろえる」教育から「伸ばす」教育へ転換し、子供一人ひとりの多様な幸せを実現するとともに、一つの学校がすべての分野・機能を担う構造から、協働する体制を構築し、デジタル技術も最大限活用しながら、社会や民間の専門性やリソースを活用する組織（教育 DX）への転換を目指す。これを実現するためには、皆同じことを一斉にやり、皆と同じことができることを評価してきたこれまでの教育に対する社会全体の価値観を変えていくことも必要となる。
  - ・「個別最適な学び」の本質は、自分で自分の学びを調整しながら、試行錯誤を繰り返すことであり、さらに、多様な子供たちが「協働」で学ぶ機会が確保されることが学校教育の役割。そして、平均点主義を脱し、「評価軸」を変えていくことは、学校だけでは困難であり、企業・大学・保護者など社会全体の理解とともに変えていくことが必要。子供が多様な人に触れ、学校にとどまらない学びの場所を提供することで、子供の持っている良さや可能性を多様な第三者から引き出すことにより、子供に対する「評価」を多様化していくことも重要。

4 感想

- 従来の教育実践と ICT 端末を最適に組み合わせることで、特に下位児童の意欲を高め、学力向上が認められていることが分かった。
- ICT 端末は、学びを共有することに優れている。それは、子供だけでなく教師同士にも言えるので、積極的に活用していく必要がある。
- ICT 端末は「ただ使えば良い」のではなく、今日の前にいる児童にとって必要なことは何かを見抜き、効果的に ICT 端末を活用できる児童を育てることが大切であると感じた。
- ICT 端末を活用することで、孤立した学びになる危険性もあるが、「個別最適な学び」と「協働的な学び」をバランス良く推進することが大切である。